



TITLE:

<學界展望> 北魏の考古資料と鮮卑の漢化

AUTHOR(S):

向井, 佑介

CITATION:

向井, 佑介. <學界展望> 北魏の考古資料と鮮卑の漢化. 東洋史研究 2009, 68(3): 516-528

ISSUE DATE:

2009-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/167620>

RIGHT:

學界展望

北魏の考古資料と鮮卑の漢化

向井佑介

はじめに

北魏を建國した拓跋珪（道武帝）は、天興元年（三九八）、平城に都をさだめ、宮室を造營し、宗廟を建てた。このころの制度や文化はまだ鮮卑の風習を色濃く残していたが、やがて太武帝による華北統一をへて次第に中國的な文化や制度になじみ、孝文帝によって爵制・軍制・儀禮・言語・習俗にいたる漢化がなしとげられた。このような鮮卑の漢化の過程は、文獻の記録によって知ることができ、その背景や意義については、川本芳昭をはじめ文獻史學の立場から研究が進められてきた。⁽¹⁾しかし、周知のように、北魏の正史である魏收の『魏書』は、拓跋鮮卑のすがたを忠實に傳えてはいない。一九八〇年に大興安嶺北部の嘎仙洞から、太武帝の太平眞君四年（四四三）に刻まれた祝文が発見され、そこに『魏書』から抹殺された鮮卑語の稱號「可寒」「可敦」が記されていたことは有名である。⁽²⁾『魏書』の編纂にあたり、鮮卑語は漢語に置きかえられ、胡風をうかがわせる記述は排除された。他方

で、五世紀の北魏のようすは『南齊書』魏虜傳にも記されているが、胡族を貶めるその記載をすべて信頼することはできない。それゆえ、近年の北魏研究では、文獻のみならず、墓誌や碑刻など出土文字資料の分析が不可欠となっているのである。

初期の鮮卑にかんする文獻史料はごく限られたものしかなく、それも彼ら自身が残した記録ではない。考古學が、初期の鮮卑文化を究明する上で一定の貢獻を果たしてきたのはそのためである。新中國では、考古學的調査の進展により鮮卑文化についての知見が蓄積し、それをもとに宿白は『鮮卑遺迹輯錄』⁽³⁾をあらわした。

大興安嶺北部のホロンバイル附近にはじまる初期の鮮卑文化が次第に南下していく過程を明らかにするとともに、代國―北魏時代における拓跋鮮卑文化の特質を論じた先驅的研究である。

宿白の研究以後、鮮卑についての考古學的知見は大幅に増加し、近年では鮮卑の墓制や文化について考古學の立場から論じた專著も公刊されるにいたった。まず、初期鮮卑墓の調査を多く手がけた内蒙古自治區文物考古研究所が、その發掘報告と考察を収録した『内蒙古地區鮮卑墓葬的發現與研究』を公刊した。その刊行にたずさわった孫危は、鮮卑にかかわる考古學的調査の成果をひろく集成し、『鮮卑考古學文化研究』⁽⁵⁾をまとめた。なかでも初期鮮卑の遷徙をめぐる問題は、孫危の著作だけでなく、許永杰・喬梁・韋正らの論考においても重視され、鮮卑考古學のひとつの核をなしてきた。もつとも、考古學的方法によって抽出された文化は、必ずしも特定の民族や部族に對應するわけではなく、土器樣式や埋葬習俗の類似性から民族を同定しようとする手法には限界がある。しかし、かつては文獻のわずかな記載から推測するにす

ぎなかった鮮卑の習俗や文化が、ようやく物質資料により具體的に把握できるようになってきたことも確かであろう。

内蒙古自治区とならんで、近年とくに資料状況が大きく變化したのは、北魏前期の都が置かれた山西省大同市の一帯である。大同の市街地からは、北魏平城の宮殿建築や禮制建築に相當する大規模な建築遺構が検出され、郊外では龐大な數の北魏墓が發掘、報告された。從來、當該期の文化は、雲岡石窟に代表される佛教彫刻と、五世紀後葉の一部の墓をもとに理解されてきたが、現在では都城・墓・佛教寺院などから總合的に議論することが可能となり、また年代の上でも北魏が平城を都とした四世紀末から五世紀末までを通時的に把握することができるようになったのである。また、本稿で詳述することはできないが、北魏前期の資料が増加したことは、明確な紀年をもたない内蒙古自治区の鮮卑墓の編年にも影響をあたえるだろう。

冒頭に述べたように、北魏文化の變遷は、ひとつの側面において、拓跋鮮卑が中國文化を受容していく過程ということができ、近年における考古學的發見も、そのような變化を裏づけている。しかし、北魏の文化が、のちに隋唐の文化に多大な影響をあたえた事實もみのがすことはできない。つまり鮮卑の漢化とは、鮮卑という一族の問題にとどまらず、ひろく中國史のなかでとらえるべき問題といえよう。以上のような問題と資料状況をかんがみ、本稿では、年代の確實な北魏平城と洛陽の時期の考古資料を對象とし、當該時期の漢化といわれる現象がどのような過程でなしとげられたのかをさぐるとともに、それが中國史においていかなる意味をもつものであるのかを考察する。

一 北魏の都城造營

代國の時代に拓跋鮮卑が據った盛樂城について、『魏書』序紀には、神元帝三十九年（二五八）に遷都した「定襄之盛樂」と、昭成帝が建國三年（三四〇）に都とした「雲中之盛樂」の二つがあり、両者がいかなる關係にあるのか、ふるくより議論があった。最近、松下憲一は『魏書』『水經注』などの文獻史料と新舊の發掘報告をもとにこの問題を整理し、「定襄之盛樂」（盛樂城）は内蒙古自治区和林格爾縣の土城子古城に相當し、その西八十里に「雲中城」すなわち托克托縣雲中故城があり、「雲中之盛樂」（雲中宮）はその中間に位置すると結論づけている。

北魏の盛樂城が和林格爾縣の土城子古城にあたることは、すでに多くの論者が認めている。發掘調査で出土した建築材料には、漢代の重圈紋瓦當・雲紋瓦當・文字瓦當のほか、北魏代の素瓣蓮華紋瓦當があった。その分布から、北魏の盛樂城は、漢代以來の城郭を利用したことが知られる。しかし、北魏の瓦はすべて洛陽遷都後のものであり、代國時代はおろか、北魏建國後も盛樂に大規模な瓦葺きの建物はなかった。『魏書』序紀によれば、穆帝六年（三一三）に「盛樂を城きて以て北都と爲し、故の平城を修めて以て南都と爲し」というが、山西省大同市にある平城遺址からも、四世紀代の建築材料は出土していない。平城建都以前には、拓跋鮮卑が大規模な宮室を築くことはなかったのだらう。

道武帝が天興元年（三九八）に遷都した平城は、それ以前から鮮卑が多く居住したが、本格的な都城の建設は、遷都後にはじまる。平城遺址は、近年調査が進んでいるとはいえ、北魏が遷都し

た直後の状況はまだ明らかではなく、『魏書』や『水經注』などの文獻史料にたよるところが大きい。當時の平城について、『南齊書』魏虜傳は次のようにいう。

什翼珪（道武帝）始めて平城に都するに、猶お水草を逐いて、城郭なし。木末（明元帝）始めて居處に土著す。佛狸（太武帝）梁（涼）州、黃龍を破りて、その居民を徙し、大いに郭邑を築く。平城の西を截ちて宮城を爲り、四角に樓を起こし、女牆・門に屋を施さず、城に又た壘なし。

すなわち、道武帝が平城に都を定めたときには、まだ城郭はなく、太武帝のときによりやく都邑の本格的な造營を始めたが、それも南朝の人からみれば質素で未熟なものに感じられたようである。これに對し、『魏書』太祖紀は、道武帝のときに「初めて宮室を營み、宗廟を建て、社稷を立て」たといひ、また天文殿や天華殿などの宮殿を造營し、京師に十二門をひらいたという。さらに、中天殿・雲母堂・金華室・西昭陽殿などを建設し、城郭の北側には大規模な鹿苑をつくった。これにしたがえば、宮城内の整備はおおむね道武帝の時期になされたことになる。

『魏書』にみえる平城關係の造營記録は、道武帝と孝文帝のときにもっとも多く、明元帝・太武帝による造營がそれに次ぐ。しかし、明元帝の時期には、宮城内の造營はほとんどなされず、宮城外の造營が中心であった。『魏書』太宗紀によると、平城の東北に豐宮を造營し、白登山の西に太祖廟を建て、その附近に宮殿を造營した。さらに、北苑に蓬臺と宮殿を築き、西苑にも宮殿を建てた。そして、平城を圍む周回三十二里の外郭を築造した。つづく太武帝の時期には、永安殿と安樂殿を新たに造營して主要な

宮殿とし、臨望觀と九華堂をつくり、城東には太學を建てた（『魏書』世宗紀上）。如渾水の左岸には大道壇廟と靜輪宮を造營した（『水經注』漂水注）。

このように『魏書』の造營記録は、『南齊書』魏虜傳の記載といささか異なっている。それでは、實態はどのようであったのだろうか。二〇〇三年に、大同市の操場城内で北魏代的大型建築基壇が発見された。東西四四・四×南北三一・五メートルの基壇は、南面に二つ、北面に一つの階段がとりつく。基壇の東側から厚い焼土層にまじって北魏代の瓦片が多数出土し、この建物は北魏末に焼亡したと推測された。この大型基壇について、鹽澤裕仁は、基壇の上面に柱穴が確認されず、かつ基壇が北高南低の傾斜をもつことを根據に、基壇上に木造建築が存在したとは考えられず、移動式のゲル宮殿を想定すべきであると述べている。さらに、瓦片をふくむ焼土層が基壇東側に集中することに着目し、基壇上の木造建築が焼失したのであれば基壇全域から焼土層と瓦片が出土しなければならぬと考え、基壇東側の焼土層は東隣の木造建築に由來するものと推定した。しかし、検出された大型基壇は、わずかに高さ一メートル程度が残存しているにすぎず、これは後代の都市建設により遺構が大きく破壊された結果である。基壇の掘込地業は深いところで當時の地表面から一・六メートルに達しており、もとの基壇の高さが一メートル程度しかなかったとは考えられない。本来の基壇上面は、礎石や柱穴をふくめてすでに削平されているのであり、焼土層が上面から検出されないのもそのためである。北魏の平城においてゲル宮殿が用いられていた可能性は皆無ではないが、少なくとも操場城の大型基壇上には瓦葺きの

木造宮殿建築があったと考えるべきである。

この大型宮殿建築の造營年代については、基壇の下から検出された土坑に北魏のふい瓦がふくまれることから、基壇の築造が北魏の初期にはさかのぼらないことが判明している。また基壇の検出状況から、数度の修理がなされたことが明らかで、北魏の瓦は少なくとも三時期にわけられる。第一は、基壇造成前の瓦で、基壇下の土坑からは瓦當が出土していないが、周囲で採集された「皇□□歲」文字瓦當がこの時期のものである可能性がたかい。第二は、「大代萬歲」「萬歲富貴」などの文字瓦當と、半圓形人面紋磚の組みあわせであり、雲岡石窟出土の瓦⁽¹⁾よりもふいことから、四六〇年以前にさかのぼり、五世紀中葉を中心とした時期に用いられたものであろう。第三は、複瓣蓮華紋瓦當と獸面紋瓦當で、これに多量の篋書き文字瓦がともなう。平城南郊で発見された明堂⁽²⁾の瓦と酷似し、孝文帝が明堂を建設した太和十五年（四九一）とちかい時期のものである。孝文帝は明堂造營の翌年に、太華殿を取り壊して太極殿を建造しており（『魏書』高祖紀下）、操場城の建築基壇とのかかわりを想起させる。ただ、操場城で発見された基壇は、魏晉洛陽城の宮城正門である閭闔門と同規模であり、太極殿にしては小さすぎる。孝文帝は平城の太極殿造營にあたり、蔣少游を洛陽に派遣し、魏晉の舊基を測量させているから、平城の太極殿は魏晉洛陽城のそれにちかい規模であったと考えられる。操場城の基壇は、太極殿の建造とほぼ同時期に修理された周邊の宮殿建築であつたのだろう。

これを平城の造營過程とあわせてみると、操場城の基壇下層の土坑より北魏初期の瓦が発見されていることから、この建物が造

營される以前に、その周囲には別の建物があったことが知られる。したがって、『魏書』太祖紀に道武帝が平城において初めて造營したという宮室には、瓦葺きの建物もふくまれていたのであろう。『魏書』莫含傳は、孫の莫題について次のように記す。

後に太祖宮室を廣くせんと欲し、平城を規度すること四方數十里、將に鄴・洛・長安の制を模さんとし、材數百萬根を運ぶ。（莫）題の機巧を以て、徴してこれを監せしむ。……久

しく待するも頗る怠りて、死を賜う。

道武帝は鄴・洛陽・長安を模倣して平城の造營を試み、莫題を造營責任者としたが、その事業は順調には進まなかった。平城で五世紀初めにさかのぼる瓦がごく少量しか出土しないことから、完成した瓦葺き建物がごくわずかであったことがうかがえる。

これに對し、操場城宮殿建築の創建時に使用された「萬歲富貴」瓦當は、同じ意匠の文字瓦當が平城を中心にひろく分布し、五世紀中葉以降、各地で瓦葺き建物が次々に建設されたことがわかる。平城において宮室と都城が本格的に整備されるのは、『南齊書』魏虜傳のいうように、太武帝のときからであろう。操場城の基壇周囲で採集された平城初期の瓦當は、かなり地域色のつよい意匠の文字瓦當であったが、五世紀中葉の瓦當は、井桁狀に瓦當面を區劃した「萬歲富貴」「大代萬歲」文字瓦當である。その祖型と考えられる瓦當が鄴城から出土し、『大趙萬歲』瓦當は後趙、「萬歲富貴」瓦當は前燕の時期と推定されている。⁽³⁾しかし、後者は後漢末から魏晉代の墓に出土例が多く、字形が前者よりふい特徴をもつことから、十六國以前おそらくは魏晉代の瓦當と考えるべきである。前燕の鄴城では、文字瓦當は使用せず、東晉

の影響下に蓮華紋瓦當が用いられていた。⁽¹⁴⁾つまり、平城の五世紀の文字瓦當は、四世紀後半に鄴城で用いられていた蓮華紋瓦當ではなく、それ以前に流行した古式の文字瓦當をあえて祖型としたのである。三燕の鄴城や龍城で蓮華紋瓦當とあわせて用いられていた半月形人面紋磚は、同様のものが平城でも使用されているから、北魏は三燕の瓦を充分に把握しており、その上で蓮華紋瓦當を採用しなかったのである。おそらく、「魏」を稱する北魏にとって、模範とすべき対象は、十六國や東晉の都城ではなく、それ以前の中原の都城であったのだろう。まして北魏は晉の冊封をうける立場でもなかった。それゆえ、東晉や三燕の蓮華紋瓦當ではなく、よりふるい文字瓦當を採用したのである。

平城の都城プランは『魏書』のみからは復元できず、『水經注』や『南齊書』を参照せねばならない。『南齊書』魏虜傳には「その郭城は宮城の南を繞り、悉く築きて坊となし、坊に巷を開く。坊の大なるものは四五百家を容れ、小なるものは六七十家。南（閉）坊ごとに搜檢し、以て奸巧に備う」とあって、宮城が都城の北よりに位置し、郭城が南を圍んでいたこと、また郭城内には坊を築き、そこに人びとが居住したことが知られる。平城の宮城は、近年の發掘成果から、大同城の北側にある操場城と呼ばれる明代の小さな城郭にほぼ重なっていたと推定され、坊はその南側に施行されたのだろう。北魏の坊制は、漢代の里制に源流をもつものといわれる。⁽¹⁵⁾漢代の里は郷・亭などと呼ばれる城壁で圍まれた空間を、墻垣で複数のブロックに區切つて、里としたものであった。これが後漢以降に散見する坊の起源になったと考えられているが、漢魏晉の坊は、特定の建物や區域を墻垣で圍つたもの

で、決して都城内にひろく施行されたものではなかった。それに對し、北魏の平城では、居住區を墻壁で圍む坊墻制によって、城内を方格狀に區劃した。朴漢濟らの研究によれば、これは北魏がさかんにおこなった徙民政策と關連し、多様な民族構成のなかで治安維持をはかるための方策であつたという。道武帝の天興元年（三九八）に「山東六州の民吏及び徒何、高麗の雜夷三十六萬、百工伎巧十萬餘口を徙し、以て京師を充す」（『魏書』太祖紀）とあるのをはじめ、『魏書』には平城附近への大量の強制移住の記録が残る。坊制は、これを管理していくために不可欠の裝置であり、胡族がたてた國家の性格を反映したものであつた。

北魏による徙民と多様な民族構成に由來して平城にひろく施行された坊制は、北魏の洛陽城で完成され、以後の北朝・隋唐の都城に繼承された。その意味では、胡族の特質が北魏以後の都城を規定しつづけたといえよう。ただ、都城の景觀や理念は、孝文帝の時期に大きく變化している。近年、佐川英治が平城の北に設けられた鹿苑の役割について檢討し、それが單に田獵の場ではなく、戰爭などで獲得した大量の家畜を收容する廣大な放牧地であつたことを明らかにしている。遊牧と密接にかかわつて生みだされた鹿苑は、やがて佛法をあつく信奉した獻文帝によって殺生が禁じられ、さらに孝文帝の治世には囚徒の再審をおこなうなど、その機能は大きく變化していく。このような變化は、北魏の遊牧的性格が次第に失われていくことと對應するだけでなく、平城の都城空間の變化にもなつて鹿苑の役割も他の都城の禁苑と大きく變わらないものになつていくことを示しているのだろう。

孝文帝は、太和十八年（四九四）に洛陽へと遷都したが、それ

に先だって平城附近で、大規模な造營事業をおこなった。それによって、遊牧民族の特色を色濃く残した北魏の文化が、中原王朝にふさわしい格式をそなえたものに變貌した。宮城における太極殿の建設と、明堂をはじめとする禮制建築の造營は、その象徴といふべきものであった。洛陽遷都の直前に平城で建設された明堂の瓦は、従来の文字瓦當ではなく、蓮華紋・獸面紋という佛教的な意匠を表現し、製作技術においても格段にすぐれたものがつくられ、生産を管理するために匏書きで工人名を記した。このような瓦の變化は、太和年間における建築様式の變化を象徴するものといえよう。⁽¹⁸⁾これらの造營を主導したのは、李冲や蔣少游といった人びとである。『魏書』蔣少游傳や『南齊書』魏虜傳によれば、蔣少游は孝文帝が平城に太廟や太極殿を營むにあたって、洛陽で魏晉の舊基を測量し、また南朝に派遣されて、建康の宮殿の様式を視察したという。北魏洛陽城から出土する遷都直後の瓦は、遷都直前の平城の瓦と酷似するだけでなく、その生産管理の方式も同じであった。おそらく洛陽城の建設は、遷都直前の平城の造營體制をそのまま繼承したのであろう。

孝文帝は平城に明堂や圓丘を建設し、禮制にのっとった都城建設を模索した。その際、蔣少游が南朝の建康を視察しているが、北魏が意圖したのは、南朝都城の再現ではなかった。『水經注』灤水注によると、孝文帝が平城に建設した明堂は、「上圓下方」の構造で、「靈臺をその上に加え、下は則ち水を引きて辟雍と爲し、水側に石を結びて塘を爲」ったという。現に、調査で明らかになった平城の明堂は、中央に方形の基壇を置き、周囲を圓形の水渠がめぐり、四方には水渠の内側に接して四門をひらく構造で

あった。これは、古典文獻にもとづいて設計されたものであり、漢長安城の南で發見された禮制建築に類似する。⁽¹⁹⁾これに對し南朝では、宋の大明五年（四六一）に明堂の建設が議論され、太廟の制にならって十二間の明堂をつくった（『宋書』禮志一）。齊は宋の明堂を繼承し、のちに梁の武帝は宋の太極殿をとりこわして十二間の明堂をつくった（『隋書』禮儀志一）。つまり南朝の明堂は、古典的な明堂建築ではなく朝堂建築を踏襲したのであり、北魏の明堂とは構造的に大きく異なっていた。孝文帝のもとで創出された北魏文化とは、南朝文化のひきうつしではなく、古制をふまえて新たに創出されたものであったのである。

二 墓制の變容

大同市の南およそ三キロ、紅旗村より七里村の一帯では、一九八七年に多數の北魏墓が發見され、翌年に調査された。現地は御河（如渾水）と十里河（武州川）の合流地點に位置する。低い臺地上に墓が密集し、發掘された北魏の墓は一六七基に達する。近年公刊されたその報告は、⁽²⁰⁾墓群を五段階に編年し、第一階段は平城遷都の天興元年（三九八）以前、第二階段は天興元年から太武帝が華北を統一した太延五年（四三九）まで、第三階段は太延五年から太和初年（四七七）まで、第四階段は太和初年から洛陽遷都（四九四）まで、第五段階は洛陽遷都以降にそれぞれ位置づけた。報告書が提示する年代観は、第一階段については實年代を確定する決め手を缺くものの、およそ第二段階以降は、墓誌などから埋葬年代の明らかな墓の副葬品と比較しても大きな齟齬がないため、ひとまずこれに依據しておく。

墓の構造をみると、第一段階と第二段階には、梯形墓室の竪井墓道土洞墓や長斜坡底墓道土洞墓が多い。第三段階になると、ひきつづき梯形墓室の竪井墓道土洞墓や長斜坡底墓道土洞墓が流行する一方で、偏室・長方形・方形墓室など墓室形態が豊富になる。前段階までの梯形墓室が、棺をおさめるのに最低限の空間しか備えていなかったのに對し、新たに出現した方形墓室は、死者の靈魂がとどまる空間として準備されたものである。さらに、第四段階以降、竪井墓道土洞墓が減少して、長斜坡底墓道土洞墓が主流となり、第五段階には埴室墓も登場する。この墓群は小型墓が多いため判然としないが、平城近郊の中型・大型墓では五世紀後半になって埴室墓が増加し、その形態は次第に胴張りのある方形單室墓に統一されていく。

墓の開口方向は、第一段階から第三段階は西向きに開口するものが多く、東向きがこれに次いで多い。これらは、原則として墓の開口方向と被葬者の頭位が一致している。墓道のない竪穴土壙墓の場合も、やはり西向きが多く、東向きがこれに次ぐ。東西向きの墓は、敦煌や西安などの西晉・十六國墓²¹に多くみるところであり、平城初期の墓制はその影響をうけたものである。家族あるいは何らかの血縁關係を單位として、墓の向きが統一されていた可能性がたかい。それが、第四段階になると、前段階まで少なかった南向きの墓が主流になり、洛陽遷都後の第五段階にはほぼ南向きに統一される。墓の開口方向が變化した思想的背景は明らかでないが、五世紀後葉になって墓制に對する何らかの規制がなされたと考えてよいだろう。漢魏晉の中原の墓は、南に開口するものが多いとはいえ例外も無數にあり、東晉・南朝では地形に應

じて墓の向きが決められた。それに對し、北朝後期や隋唐以後の墓は、原則として南向きであり、五世紀後葉以後の北魏墓制が、後代に大きな影響をおよぼしたことがわかる。

また、調査された一六七基のうち七五基、四四・六パーセントの墓からウシ・ヒツジ・ウマ・イヌなどの動物骨が出土した。動物を犠牲として墓に入れる習慣は、匈奴や鮮卑の墓にしばしばみるところである。四一基は棺の前に置かれた方形や圓形の漆案上から動物骨が出土している。別の一七基は墓室内に壁龕を設け、そこに犠牲を置いていた。墓道に犠牲をならべた例も少なくない。動物骨の出土は、時期の下る墓ほど少なく、洛陽遷都直前には、埋葬に際して動物犠牲をささげる例はごく少數となる。副葬品は一貫して土器が多く、少量の漆器や青銅器が加わる。平城初期の土器は、器壁があつく、胎土のあらい素朴な土器であるが、次第に器壁がうすい精製土器が増え、五世紀後葉には回轉印紋で流麗な忍冬唐草紋をかざった土器もあらわれる。また、五世紀後葉になって帷帳の支柱をささえる礎石の出土が多くなることは、當該期における墓室の大型化と對應している。

當時の平城には多様な民族が居住していたが、大同南郊北魏墓群から出土した人骨は、形質學的に漢族とは異なり、鮮卑をふくむ胡族の墓地であつたと考えられている。したがって、この墓地の様相から、平城の時代に鮮卑がいかにして中國文化を受容していったのかをうかがうことができよう。平城遷都の初期には、鮮卑の墓は長城以北にいたときと大きく變わず、墓室は棺をおさめるだけの小さなもので、土器とわずかな青銅器などを副葬し、それに動物犠牲が加えられた。五世紀後葉になると、墓の開口方

向は南向きとなり、方形の單室墓が増加し、墓制が統一される一方で、動物犠牲のような鮮卑特有の葬俗は次第に失われていく。大同近郊の中型・大型墓をみると、五世紀後葉には、陶俑や石牀をはじめ、さまざまな副葬品や葬具がおさめられるようになる。このような墓制の變容は、五世紀をつうじて鮮卑が中國文化を受容していった結果であり、それが五世紀後葉に大きく進展することを意味している。

しかし、大同南郊の墓群は小型墓ばかりであり、大型墓においては、中國文化の受容がより早く進んでいた。近年、大同東郊の沙嶺村で、平城時期の壁畫墓が發掘調査されている。²²この大同沙嶺七號墓は、塼築の長方形單室墓で、墓室や羨道の壁面に壁畫があった。魏晉代の風格をのこした壁畫には、墓主夫妻のほか、出行圖や宴飲圖などが描かれていた。さらに、墓室内に残された漆畫殘片に、「……元年歲次豕韋月建中呂廿一日丁未、侍中主客尙書領太子少保平西大將軍……破多羅太夫人／…殯于第宅、迄於仲秋八月、將耐葬□□□□於殯宮易以□…慈祥之永住／…無期、欲□之德昊天罔極…莫□□哀哉…□歲月云」と三行にわたる墨書題記があった。趙瑞民と劉俊喜によると、墨書にみえる「歲次豕韋」は十二支の亥年、「中呂」の月は四月にあたる。「元年」で亥年四月の「二十一日丁未」に相當するのは太武帝の太延元年（四三五）のみである。破多羅は破多蘭とも記され、『北史』高車傳に「牽屯山鮮卑別種破多蘭部、世傳主部落」とあつて、破多蘭（羅）部は鮮卑の別種と認識されていた。『魏書』官氏志によると、太和の官制では太子少保は東宮三少のひとつで、二品上に相當する。太武帝の時期には、魏晉・十六國的な風格を色濃く殘

しているとはいえ、中國的な塼室墓がすでに高位の墓に採用されており、それが孝文帝のころになると、より廣範圍に、より洗練された統一的な墓制として浸透していったのである。

道武帝が平城に都をさだめてからも、北魏皇帝は長城以北の金陵に葬られ、皇族や一部の有力貴族は、そこに陪葬された。金陵は史書に「盛樂金陵」「雲中金陵」としてあらわれるが、現在もその位置が特定できないように、巨大な墳丘や大規模な陵園は築かれなかったらしい。²⁴北魏の陵墓に大きな變化があらわれるのは、孝文帝の義祖母である文明太皇太后馮氏の方山永固陵においてである。永固陵は太和四年から八年（四八一―四八四）に造營され、馮氏は太和十四年（四九〇）に葬られた。方山は平城の北およそ二五キロに所在する臺形の山で、山上に築かれた馮氏墓の墳丘は、現在の大同市街からもはるかにのぞむことができる。その墳丘は、半球形で高さ二メートル、直徑約九〇メートルを測り、東西一二二×南北一〇六メートルの低い方形基壇上に築かれている。馮氏墓の北には孝文帝の壽陵として築かれた萬年堂があり、南には永固堂や思遠佛寺などが分布して、壯大な陵園がひろがっていた。²⁵魏晉・南朝では、巨大な墳丘をともしなう陵墓はほとんどない。中華皇帝として胡漢に君臨しようとする北魏帝室は、漢の滅亡をもつて途絶えた巨大墳丘墓を、自らの權威をしめす裝置として復活させたのである。²⁶

孝文帝は洛陽に遷都後、北郊の邙山に長陵を築き、ここを北魏宗室の墓地とした。二〇〇四年に調査された長陵の墳丘は現存で直徑一〇三メートル、高さ二一メートルの半球形で、その西北に築かれた文昭皇后の陵は直徑四二メートル、高さ十五メートルで

あった。⁽²⁷⁾これにより、邙山の北魏陵墓群では、皇帝陵の墳丘が百メートルあまり、皇后陵はその半分以上の規模であったことがうかがえる。鄴城の西北にひろがる東魏・北齊陵墓群をみても、直徑百メートルをこえる墳丘は、皇帝陵クラスの陵墓にしかみられず、墳丘規模は身分秩序に對應して厳密に規定されていた。その先例となったのが方山永固陵の墳丘であった可能性はたかい。また、墓室構造をみると、平城時期の墓が多様な構造であったのに對し、洛陽遷都後の北魏墓は、ほとんどが胴張りをもつ博築の方形單室墓に統一される。方山永固陵の墓室は、前後二室構造であったが、前室の後壁には石造の門扉がとりつき、前室が玄關の役割を果たしていたことがわかる。その構造は以後の方形單室墓となんら變わりなく、墳丘規模だけでなく墓室構造においても、方山永固陵が以後の陵墓を規定していたことがわかる。

平城の時代には、金陵に葬られた皇族や一部の高官を除いて、ほとんどの官人は、都の近邊に葬られた。北魏が華北を統一する過程で、平城とその周邊に移住させた人びとは、本貫地ではなく平城周邊に葬られ、本貫地への歸葬が可能となったのは洛陽遷都後であった。⁽³⁰⁾事實、大同市の東郊で發掘された北魏墓のなかには、鮮卑のみならず多様な民族がふくまれている。一九六五年とその翌年に調査された大同市東南の司馬金龍墓⁽³¹⁾は、出土した墓誌によつて、夫人の姫辰が延興四年（四七四）に、金龍そのひとは太和八年（四八四）に没したことが明らかである。晉の皇族であった父の司馬楚之は、劉宋の初めに亡命して北魏に仕え、金陵に陪葬された。司馬金龍は金陵に陪葬されることはなかったが、平城近郊に瑯琊王として葬られた。大型の博室墓から出土した漆繪屏風

には、東晉・南朝の作風を髣髴させる孫叔敖・孝子舜などの説話圖が描かれていた。その製作地には議論があるものの、石牀と屏風の組みあわせは、北魏の葬具に特有のものである。墓室内から鮮卑服を身につけた綠袖俑が多數發見されたことから明らかに、漢人であっても、埋葬に用いられた葬具や俑は、鮮卑のものを受容していたのである。

平城の東郊から發見される北魏墓は、南郊のそれにくらべて大型の博室墓が多く、墓誌などから被葬者が明らかでない例も少なくない。御河の東岸では、司馬金龍墓のほか、幽州刺史・敦煌公の宋紹祖とその一族の墓が發見され、その正式報告は『大同雁北師院北魏墓群』⁽³²⁾として公刊されている。また洛陽遷都後には皇族である元淑の墓も築かれている。『魏書』王叡傳によれば、太和五年（四八一）に中山王の王叡が没したときには、敕命によつて溫明祕器が賜與され、宕昌公王遇が喪事を監護し、内侍長董醜奴が墳墓を造營し、「將に城東に葬らるるや、高祖城樓に登り以てこれを望」んだという。皇帝・皇族や一部の貴族は金陵に葬られ、それに次ぐ高位の人びとが平城の東郊に葬地をあたらえられ、それ以外の官人は南郊に葬られたのである。

洛陽では、漢魏洛陽城の西北に北魏陵墓群があり、孝文帝の死後、本格的に陵墓の造營が開始された。宿白の研究によると、陵墓群は孝文帝の長陵を中心に分布し、皇族・貴族墓地は長陵の東側にひろがる。皇族墓地は、孝文帝の七世祖である道武帝子孫の墓地を中心に、左右にわかれて配置される。六世祖明元帝、四世祖景穆帝、二世祖獻文帝の子孫は右側に、五世祖太武帝、三世祖文成帝の子孫は左側に葬られた。孝文帝の子孫の墓地は、ほぼ中

央に分布するが、一部は左側にある。このように、皇族の墓域は昭穆制を想起させる配置をとるが、墓域が左右にまたがっている部分もあるため、明確に昭穆を意圖したものかは判断が難しい。むしろ宿白は、邙山に北魏陵墓が集中することを鮮卑の族葬の遺風ととらえ、さらに墓群内の配置は母系半族を墓地に反映させたものであることを強調した³⁴⁾。

邙山の陵墓群が、皇帝陵を頂點として周圍に皇族・貴族の墓域を設定したことは宿白の指摘するところである。そこに鮮卑の習俗が反映されていた可能性は否定できないが、その點ばかりに拘泥すべきではない。孝文帝が太和十九年(四九五)六月丙辰の詔で「遷洛の民、死すれば河南に葬り、北に還るを得ず」(『魏書』高祖紀下)と南遷の代人に對して「河南洛陽人」たることを強制したことはよく知られている。洛陽に遷された人びとは、身分や職能に應じて居住地がさだめられた³⁵⁾。そのなかで、支配者層の多くが洛陽城西北の邙山に葬地をあたえられたのである。孝文帝が意圖したのは、洛陽に居住地と葬地をあたえることで、階層や士庶の秩序を明確化することであつたと考えられる。その秩序は、邙山には葬られることのない下位の階層にもおよんだであろう。邙山の陵墓群とは、孝文帝の目指した皇帝を頂點とする集権的な身分秩序の體現であつたのである。

洛陽遷都後の北魏の墓制は、統一的な規格のなかに、秩序を視覚的にあらわすように變化していた。洛陽の邙山陵墓群では、皇帝陵の墳丘規模は方山永固陵を先例としてさだめられた。陵墓の位置は、皇帝陵を頂點として周圍に皇族・貴族の墓域が設定された。墓室は塼築の方形單室墓に統一され、その規模に身分秩序

があらわされた。墓誌は正方形のものが選ばれ、大小の差に身分差が反映された。一般に墓誌に紋様を刻むことは少なく、蓋にも題記のみが刻まれた。紋様を刻んだ墓誌は大型品に限られ、元暉墓誌や爾朱紹・爾朱襲墓誌など、高位の被葬者のために製作されたものであつた。墓室内におさめられた陶俑の数は、身分の高下に對應してその數量がさだめられた³⁶⁾。このような特徴は、いずれも北朝後期から唐代前期までの墓制に共通する。その基本的な要素は、文明太皇太后馮氏の方山永固陵にみるように、遷都直前の平城において出そろっていたが、それが定着し、徹底するのは洛陽においてであつた。

おわりに

北魏という王朝が中國史において果たした役割を考えると、漢化と呼ばれる現象は、原始的な習俗をもつ胡族が中國文化によつて教化されたという圖式のみでは理解できない。十六國をふくめて胡族のたてた國家は、武力によつて漢人を壓倒した。しかし中國の王朝として永續的な統治をおこなうためには、胡族の君主といえども、中國文化を受容し、それを正しく繼承する必要がある。北魏は胡族が統治する王朝であるがゆえに、胡漢に君臨するためのさまざまな裝置を生みださねばならなかつたのである。

孝文帝の造營した都城や陵墓の制度には、それが端的にあらわれており、その特徴は大きく二つがあると考えられる。第一は、中國古典文化の正統な繼承であつた。平城の明堂が南朝とは異なり、古典文獻の解釋にたち、漢代と同様の明堂を造營したことは、そのあらわれである。第二は、皇帝を頂點とする中央集権的な身分

秩序の形成である。平城や洛陽城では、都城内にひろく坊制を施行し、人民の統制を徹底した。また、洛陽の邙山陵墓群では、孝文帝の長陵を頂點に、皇族や貴族の墓域がさだめられ、墳丘や墓室構造が齊一化し、その大きさによって身分秩序が表現された。

北魏では、胡族の風習によって中國の傳統文化に變革をきたした部分も少なくないが、それは必ずしも中國文化に對する理解が充分でなかったためとはいきれず、支配裝置として必要であるがゆえに改變を加えた部分もあったのであろう。北魏の制度や文化が、隋唐代にいたつてもなお大きな影響力をもちつづけたのは、胡族が支配者として君臨するシステムをつくりあげること成功したからではないだろうか。

註

- (1) 川本芳昭『魏晉南北朝時代の民族問題』汲古書院、一九九八年など。
- (2) 米文平「鮮卑石室の發現與初步研究」『文物』一九八一年第二期。
- (3) 宿白「東北、內蒙古地區的鮮卑遺迹——鮮卑遺迹輯錄之一」『文物』一九七七年第五期、「盛樂、平城一帶的拓跋鮮卑——北魏遺迹——鮮卑遺迹輯錄之二」『文物』一九七七年第十一期、「北魏洛陽城和北邙陵墓——鮮卑遺迹輯錄之三」『文物』一九七八年第七期。
- (4) 內蒙古自治區文物考古研究所編『內蒙古地區鮮卑墓葬的發現與研究』科學出版社、二〇〇四年。
- (5) 孫危『鮮卑考古學文化研究』科學出版社、二〇〇七年。
- (6) 許永杰「鮮卑遺存的考古學考察」『北方文物』一九九三年第四期。喬梁「鮮卑遺存的認定與研究」『中國考古學的跨世紀反思（下）』商務印書館、一九九九年。韋正「鮮卑墓葬研究」『考古學報』二〇〇九年第三期。
- (7) 松下憲一「定義之盛樂」と「雲中之盛樂」——鮮卑拓跋國家的都城と陵墓——『史朋』第四〇號、二〇〇七年。
- (8) 駒井和愛「附錄 中國西北ホリソングルの漢成樂縣址」『曲阜魯城の遺蹟』考古學研究第二冊、一九五一年。內蒙古文物考古研究所「內蒙古和林格爾縣土城子古城發掘報告」『考古學集刊』第六集、一九八九年、「和林格爾縣土城子古城考古發掘主要收穫」『內蒙古文物考古』二〇〇六年第一期。
- (9) 山西省考古研究所・大同市考古研究所・大同市博物館・山西大學考古系「大同操場城北魏建築遺址發掘報告」『考古學報』二〇〇五年第四期。
- (10) 鹽澤裕仁「鮮卑の都城“平城”——その都市空間の樣相——」『法政史學』第六八號、二〇〇七年。
- (11) 岡村秀典編『雲岡石窟』遺物篇、朋友書店、二〇〇六年。
- (12) 劉俊喜・張志忠「北魏明堂辟雍遺址南門發掘簡報」『山西省考古學會編『山西省考古學會論文集』三、山西古籍出版社、二〇〇〇年。王銀田・曹臣明・韓生存「山西大同市北魏明堂遺址一九九五年的發掘」『考古』二〇〇一年第三期。
- (13) 河北省臨漳縣文物保管所「鄴城調查和鑽探簡報」『中原文物』一九八三年第四期。
- (14) 朱岩石・何利群「河北磁縣北朝墓群M六三及十六國窯

- 址」『中國文物報』二〇〇七年七月二七日二版。窯址から出土した素瓣蓮華紋瓦當は、東晉のものと同化した四世紀後半の瓦當である。
- (15) 宮崎市定「漢代の里制と唐代の坊制」『東洋史研究』第二一卷第三號、一九六二年。
- (16) 朴漢濟（尹素英譯）「北魏洛陽社會と胡漢體制——都城區畫と住民分布を中心に——」『お茶の水史學』第三四號、一九九一年。妹尾達彦「都市の生活と文化」『魏晉南北朝隋唐史の基本問題』汲古書院、一九九七年。
- (17) 佐川英治「遊牧と農耕の間——北魏平城の鹿苑の機能とその變遷——」『岡山大學文學部紀要』第四七號、二〇〇七年。
- (18) 向井佑介「中國北朝における瓦生産の展開」『史林』第八七卷第五號、二〇〇四年。
- (19) 中國社會科學院考古研究所「西漢禮制建築遺址」文物出版社、二〇〇三年。
- (20) 山西大學歷史文化學院・山西省考古研究所・大同市博物館「大同南郊北魏墓群」科學出版社、二〇〇六年。
- (21) 甘肅省文物考古研究所「敦煌祁家灣——西晉十六國墓葬發掘報告——」文物出版社、一九九四年。咸陽市文物考古研究所「咸陽十六國墓」文物出版社、二〇〇六年。
- (22) 大同市考古研究所「山西大同沙嶺北魏壁畫墓發掘簡報」『文物』二〇〇六年第一期。
- (23) 趙瑞民・劉俊喜「大同沙嶺北魏壁畫墓出土漆皮文字考」『文物』二〇〇六年第一期。
- (24) 李俊清「北魏金陵地理位置的初步考察」『文物季刊』一九九〇年第一期など。
- (25) 岡村秀典・向井佑介編「北魏方山永固陵の研究——東亞考古學會一九三九年收藏品を中心として——」『東方學報』京都第八〇冊、二〇〇七年など。
- (26) 村元健一「北魏永固陵の造營」『古代文化』第五二卷第二號、二〇〇〇年。
- (27) 洛陽市第二文物工作隊「北魏孝文帝長陵的調查和鑽探」『文物』第七期、二〇〇五年。
- (28) 馬忠理「磁縣北朝墓群——東魏北齊陵墓兆域考——」『文物』一九九四年第一期。
- (29) 大同市博物館・山西省文物工作委員會「大同方山北魏永固陵」『文物』一九七八年第七期。
- (30) 室山留美子「北魏漢人官僚とその埋葬地選擇」『東洋學報』第八七卷第四號、二〇〇六年。
- (31) 山西省大同市博物館・山西省文物工作委員會「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」『文物』一九九二年第三期。
- (32) 大同市考古研究所「大同雁北師院北魏墓群」文物出版社、二〇〇八年。
- (33) 前掲註(3) 宿白「北魏洛陽城和北邙陵墓」。
- (34) 窪添慶文（「本貫、居住地、葬地から見た北魏宗室」『魏晉南北朝官僚制研究』汲古書院、二〇〇三年）がこれを再検討し、邙山の陵墓群には、先祖とする皇帝ごとにまとまりがあり、同じ皇帝の子孫でも、皇子ごとに墓域のまとまりがあることを確認している。その際、陵墓群の配置は昭

穆制を想起させるが、そうだとすれば代北時代の遺制の残存ととらえる宿白の理解とどう整合するのか、という疑問を呈示されている。しかし、この疑問には若干の誤解があるように思われる。宿白の理解では、そもそも周の昭穆制自體がその氏族社會を反映したものであって、それを「禮」になつた制度とするのは後世の評価にすぎない。その當否はともかく、昭穆制を想起させる邙山陵墓群の配置こそが、鮮卑の原始的な習俗を反映していると宿白は考

えたのである。

(35) 前掲註(16) 朴漢濟「北魏洛陽社會と胡漢體制」。

(36) 蘇哲「五胡十六國・北朝時代の出行圖と鹵簿備」後藤直・茂木雅博編『東アジアと日本の考古學』第二卷、同成社、二〇〇二年。

附記

本稿は、平成一〇～二一年度科學研究費補助金(若手研究(B))による研究成果の一部である。